



飯野由里子 著

『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』

(生活書院, 2008年, B6判, 200頁, 2,310円)

杉浦 郁子

(中央大学文学部非常勤講師)

日本初のレズビアン・サークル「若草の会」の始まりは、1971年12月のことだとされているが、本書が扱うのは、それから約5年を経て登場する「レズビアン・フェミニストによるミニコミ誌」である。70年代後半に相次いで発行されたミニコミ誌3誌に加え、85年5月から現在まで続いている『れ組通信』が、レズビアン・フェミニストによるミニコミ誌だと見なされている。

本書では、以上のミニコミ誌に掲載された「レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー」、すなわち「『レズビアン』というカテゴリーを用いながら、女性たちがそれまで存在していなかったような〈わたしたち〉という集合性を創造・形成しようとしたストーリー」(53頁)に光が当てられ、「共感しながらそれらを『読みなおす』」(28頁)ことがなされている。

なかでも著書が再読するのは「日本のレズビアン・アクティヴィズムにおける3つの契機」(26頁)について書かれた「ストーリー」である。著者はまず、1970年代後半に発行されたミニコミ誌を1つ目の「契機」として取り上げる(第2章)。ミニコミ誌の登場は、〈わたしたち〉という集合性が語られ始めたという点で、コミュニティ史における「契機」であった。ミニコミ誌から引用された文章(「ストーリー」)は、「レズビアン」というカテゴリーに与えられた否定的な意味を転換しようとする意図に満ちているが、そのやり方はレズビアン・フェミニズム的である。

レズビアン・フェミニズムは、「異性愛という制度」を女性抑圧の根源と見なし、その制度を転覆する手段としての可能性を「女性同士の関係性」に託す思想と実践である。著者が第2章で取り上げた「ストーリー」において、「レズビアン」の意味の転換は、基本的に、レズビアンをフェミニストとして格上げすることでなされている。そのため、1970年代初頭のウーマン・リブのなかに存在した(とされる)異性愛フェミニストのレズビアン嫌悪や、レズビアンが固有に抱える課題は棚上げされてしまう。さらに、「おとこ性」をもつレズビアンや「ブッチ(男役)-フェム(女役)」の関係を結ぶレズビアンを排除する力も、そこには働いている。

著者は、「〈わたしたち〉のストーリー」のもつこうした問題性を認めたくえで、しかしながら、それは「リブの女」と「レズビアン」の結びつきを「回復しようとするストーリー」(85頁)だったのだと、その意義を最大限に引き出そうとする。

続く第3章と第4章では、主に『れ組通信』に掲載された「ストーリー」を読み

なおしていく。1992年5月に埼玉県で開催された「ALN（アジア系レズビアン・ネットワーク）まつり」は、海外にネットワークを拡げようとした「契機」であった（第3章）。「アジア」との対比において「日本のレズビアン」という集合性が作られていくなか、在日コリアンのレズビアンを「無視」という出来事が起こってしまう。彼女からの異議申し立て、主催者の対応や意見、事態の経過は『れ組通信』で包み隠さず報告されるが、ALNまつりの目指した理想と現実のギャップが関係者に苦い思いを残したことが伝わってくるやりとりである。しかし著者は、それらの「ストーリー」にも「連携の政治を切り崩すのではなく、促進させるような」（132頁）回路を見て取ろうとする。第4章でもまた別の「契機」について書かれた「ストーリー」が「共感的に」読み込まれる。

ところで、著者の「読み」がここまで共感的になされる理由は何だろうか。レズビアン集合性を語ることを「解放」の過程として読み解いていくことで、解放されるのは誰なのだろうか。それは他でもない著者自身である。著者は、過去に語られた「ストーリー」に意義を見出すが、それは当時の「語り手」にとっての意義とは限らず、むしろ1人の「読み手」にとっての意義だと述べている（179頁、184頁）。本書があぶり出したのは、「語り手」たちと世代を異にする研究者が過去の活動と出会い、そこに現代的な意義を見出すことで「エンパワー」（55頁）されなければならない現状である。著者が50代、60代を迎えているレズビアンたちのアイデンティティ・ポリティクスを再評価しなければならなかったのは、それが、女性学やジェンダー研究、ポスト構造主義的なセクシュアリティ研究やクィア理論が取り組む課題と（183頁）、あるいは若いLGBT（Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender）の活動と、ほとんど接合されていない現状に閉塞感を抱いていたからである。この問題意識を示したことは重要であったし、実際に若い活動家や研究者への影響も大いにあることだろう。

ところで本書は、著者の置かれている立場から「〈わたしたち〉のストーリー」を再読したものであり、レズビアン・アクティヴィズムの歴史記述として書かれてはいない。つまり、何らかの事実性を賭けて書かれたものではない。したがって、3つの「契機」以外の「ストーリー」を扱っていないことや、「ストーリー」に外在する情報が不足していることを批判するのは、的外れなのかもしれない。

しかし、それでも本書は過去の活動を歴史化する効果をもつ。著者による「読み」は、新たな「ストーリー」である。歴史が「ストーリー（ナラティブ）」であることを考えれば、本書が歴史記述という側面をもつことは否めない。マイノリティの活動の歴史記述を進める重要性は評者も認めるところであり、その点においても本書は評価に値する。しかし、著者が本書のもつこの側面にどこまで自覚的であったのかについては、疑問が残った。たとえば、取り上げられたミニコミ誌を「レズビアン・フェミニストによるもの」とするのは妥当なのだろうか。こうした普遍化にあたっては、もう少し周到的な検討がなされるべきではなかったか。

また、本書が歴史化した人々への影響も無視できない。著者が多くの「ストーリ

一」を引いた『れ組通信』の最新号（250号，2008年9月28日発行，脱稿当時の最新号）に，『れ組通信』からの引用にさいしてプライバシー保護の観点から慎重を期してほしいとの著者への問題提起，および研究者への「お願い」が掲載された。本書は，運動と研究との接合をも目指したものであったが，それぞれの抱える現実のギャップがまたも顕わになった。「連携の政治」の難しさを痛感するとともに，研究倫理の問題として重く受け止めたい。